

生活の質と精神的充足感から見た生涯学習ニーズ

—成人期の「アイデンティティ探求」ニーズの分析—

岡本 祐子

(2004年9月30日受理)

An Analysis of the Needs for Life Long Learning from the view points of Quality of Life and Psychological Well-being
— A Survey of the Needs of “Search for Identity” in Adulthood —

Yuko Okamoto

The purposes of this study were to investigate the needs for learning in adulthood, and to analyze the relationship between these contents, and QOL and psychological well-being. Data was obtained from the questionnaire distributed to 533 men and women aged 20's to 70's. The participants were asked to select 5 tasks and/or problems, which ①they were most interested in, ②they wanted to learn, and ③they needed to support exceedingly, and filled out Quality of Life Test by WHO (1995), and Purpose in Life-Test by Crumbaugh and Maholick (1969).

The main results were summarized as follows: (1) Most interested and needed tasks and problems were ①health, ②search for identity, and ③internet web and personal computer. (2) The task of “search for identity” were selected by many participants on every life stages in high ranking. The contents of needs for learning were reflected of the psycho-social tasks in each life stages. (3) Significant difference in the contents of these needs was not found between high and low level of QOL and psychological well-being. However, the group of high QOL and well-being had more needs for active learning and the low QOL group had more needs for supports.

Key words : Needs for life long learning, Search for identity, QOL, Psychological well-being.

キーワード：生涯学習ニーズ, アイデンティティ探求, 生活の質, 精神的充足感.

問題および目的

今日、学校を卒業した後の主体的な学習、つまり生涯学習に対する動機づけは高く、多様なニーズが見られる。それらは、大学・大学院への入学、放送大学や各地の大学の公開講座の受講のみにとどまらず、地域社会で開催されるさまざまな学習講座への参加など、多岐にわたっている。

一方、このような市民の生涯学習ニーズの高まりと連動して、地域の自治体がまちづくり政策の一環として、生涯学習支援を構想する動きも見られる。例えば、広島県においては、2002年に広島県および広島市からそれぞれ、「広島県生涯学習審議会答申」、「第2次広島市生涯学習のまちづくり推進構想」とし

て、地域社会の生涯学習支援システムの構想に関する答申が出されている。後者は、東広島市全体を「生涯学習のまち」として整備し、生涯学習を推進しようとするもので、①生涯学習の基礎作り（学校教育と家庭・地域教育の適切な役割分担と連携）、②学習機会の拡充（市民の学習ニーズや社会的なニーズへの対応）、③学習プログラムの研究開発、④専門スタッフの養成と研修、⑤学習情報の提供・学習相談の5つを柱として、生涯学習支援事業を体系的に整備することが計画され、実施されつつある。

広島大学は、2002～2004年度、文部科学省地域貢献特別支援事業プログラムに採択され、大学と地域が連携した高度生涯学習支援システムの構築をめざしてきた。高度生涯学習支援は、学習内容そのもののレ

ベルの高度化とともに、地域の人々の個々のニーズにしたがったきめ細かな学習支援を意味する。その目標は、個々人が人生の各々のライフステージにおいて、主体的で充足した生き方を達成していくことに他ならない。つまりそれは、青年期から高齢期までの各ライフステージに応じた個々人のwell-beingを達成していくための支援であり、各ライフステージにおける発達の課題を達成し、相互のケアを学習していくことへの支援である。つまり、主体的な学習とケアや援助は一体化したものであり、両者の連携が成立してはじめて、地域社会のwell-beingが達成されると考えられる。

生涯学習支援に関しては、これまで社会教育学の視点から、数多くの研究が行われている。生涯を通じてのwell-beingの達成については、生涯発達心理学や臨床心理学の視点からの考察もまた不可欠である。しかしながら、生涯学習支援という視点から、ライフサイクル全体を展望した、well-beingの達成、つまり自分らしい生き方の主体的探求と実践を検討した心理学的研究は、ほとんど見られない。基礎となる理論としては、古くは、Havighurst (1953) の発達課題論、Erikson (1950) の心理社会的発達論等が見られるが、これを生涯学習の実践や支援に応用した試みは行われていない。

本研究は、「人生80年型ライフサイクル」、つまり少子高齢社会に対応した生涯学習支援システムを構築する基礎研究として、主として生涯発達心理学の視点から以下の内容について検討することを目的とした。

1. 青年後期から高齢期までの各ライフステージにおける①関心のある問題・課題（以下、「関心課題」と記す）、②主体的に学習したい課題（以下、「学習希望課題」）、③助言や援助を必要とする課題（以下、「要援助課題」）の内容を把握する。
2. 生活の質および心理的充足感 (psychological well-being) の程度による、関心課題、学習希望課題、要援助課題の内容と特徴の相違を分析する。
3. 上記の1., 2. をもとにwell-beingを達成するために必要な学習課題・要援助課題を検討する。

方 法

1. 調査対象者

東広島市在住の20～70代の男女2000名。住民基本台帳より層化2段階無作為抽出法により対象者を抽出し、郵送により配布・回収した（回収数541、回収率27.1%）。そのうち記入漏れのあったもの8名を除く533名を分析の対象とした（有効回答率26.7%）。

分析の対象とした調査対象者の属性は、以下のとおりである。男性229名（43%）、女性304名（57%）。婚姻形態：既婚77%、未婚18%、離婚2%、死別3%。家族形態：親子2世代世帯49%、夫婦のみの1世代世帯22%、親・子・孫の3世代世帯18%、1人世帯9%、その他2%。回答者は、やや女性が多かったが、それぞれの属性の比率は、ほぼ東広島市の実態を反映したものである。

表1 男女別に見た関心課題・学習希望課題・要援助課題

(選択率の高い順に5位まで掲載)

性別	関心のある課題	学習してみたい課題	助言や援助を要する課題
男性	1. 体力・健康づくり 2. 「自分らしい生き方」の見直しや生きがいの探求 3. 就職・再就職・転職 4. インターネット・パソコン 5. 政治・経済に関する問題	1. インターネット・パソコン 2. 起業・資格取得 2. キャリアや専門性の向上 2. 体力・健康づくり 5. 「自分らしい生き方」の見直しや生きがいの探求	1. インターネット・パソコン 2. 体力・健康づくり 3. 就職・再就職・転職 4. 「自分らしい生き方」の見直しや生きがいの探求 5. キャリアや専門性の向上
女性	1. 体力・健康づくり 2. 「自分らしい生き方」の見直しや生きがいの探求 3. 子育て・子どもの教育 4. 就職・再就職・転職 5. 友人・仲間づくり	1. インターネット・パソコン 2. 料理・手芸・園芸など 3. 音楽・美術・茶華道・書道など 4. 「自分らしい生き方」の見直しや生きがいの探求 5. 福祉に関する問題	1. 「自分らしい生き方」の見直しや生きがいの探求 2. 子育て・子どもの教育 3. 体力・健康づくり 4. 就職・再就職・転職 5. インターネット・パソコン

2. 手続き

以下の内容からなる質問紙調査を実施した。

1. 属性：性別、年齢、婚姻形態、家族形態、子どもの有無、末子の年齢、職業、最終学歴など。
2. 関心課題・学習希望課題・要援助課題：職業、家庭生活、社会生活、健康、趣味・教養、自分の生き方の6領域における課題や問題を30項目提示し、その中から、現在、①「最も関心のある問題」(5つまで)、②「最も学習してみたい問題」(3つまで)、③「助言や援助を必要としている問題」(5つまで)を選択させた。
3. 生活の質：WHO(1995)の作成したQOL(Quality of Life Test) 17項目。
4. 心理的充足感：Crumbaugh & Maholick (1969)のPIL (Purpose-in-Life Test) 20項目。

結果および考察

1. 関心課題・学習希望課題・要援助課題

全体的にみた関心課題、学習希望課題、要援助課題は、図1～図3に示した。

関心課題は、1位 体力・健康づくり(295名、対象者の55.5%が選択)、2位「自分らしい生き方」の

見直しや生きがいの探求(239名、44.9%)、3位 就職・再就職・転職(163名、30.6%)、4位 子育て・子どもの教育(150名、28.2%)であった(図1)。

学習希望課題は、1位 インターネットやパソコン(188名、35.3%)、2位 料理・手芸・園芸など(120名、22.6%)、3位 体力・健康づくり(101名、19.0%)、4位「自分らしい生き方」の見直しや生きがいの探求(100名、18.8%)であった(図2)。

要援助課題は、1位「自分らしい生き方」の見直しや生きがいの探求(80名、15.0%)、2位 インターネット・パソコン、および体力・健康づくり(それぞれ77名、14.5%)、4位 就職・再就職・転職(74名、13.9%)であった(図3)。

2. 男女別にみた関心課題・学習希望課題・要援助課題

男女別に見た関心課題、学習希望課題、要援助課題は、表1に示した。男女とも、体力・健康づくり、「自分らしい生き方」の見直しや生きがいの探求、インターネット・パソコンが上位を占めていた。また男性では、関心課題、学習希望課題、要援助課題ともに、就職・再就職・転職、起業・資格取得、キャリア・専門性の向上など、職能的課題が多く選択されており、女性では、子育て・子どもの教育、料理・手芸・園芸

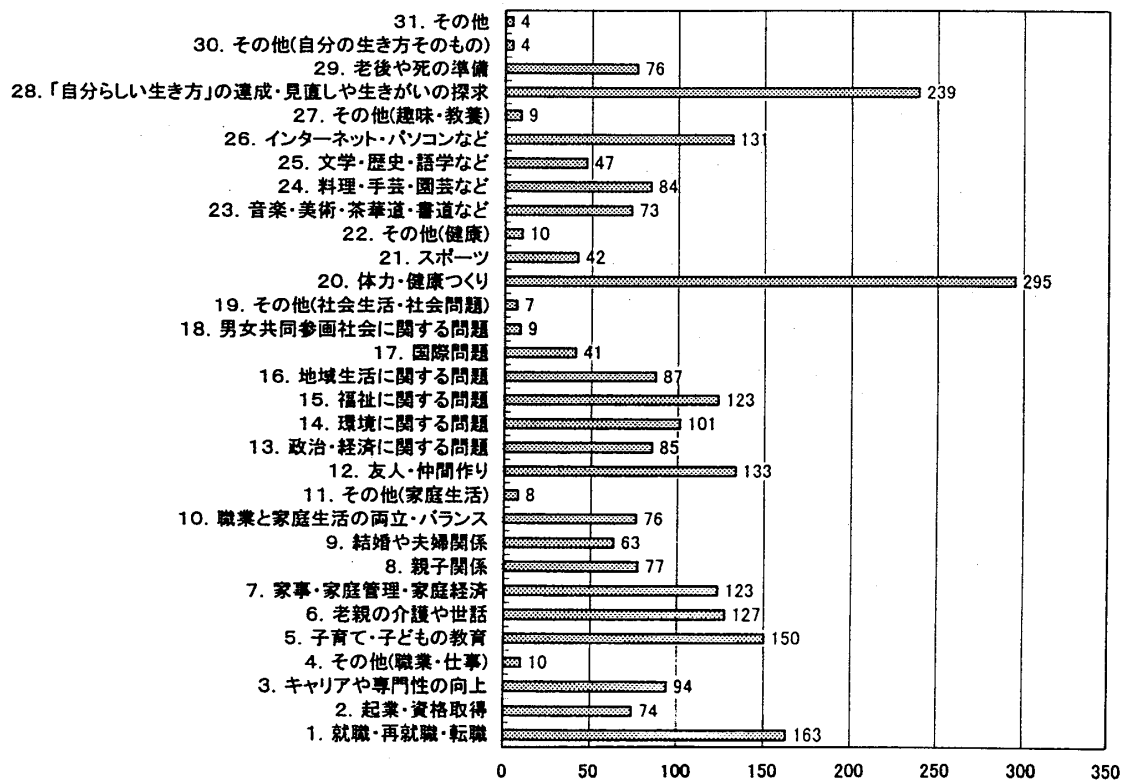


図1 最も関心のある問題・課題

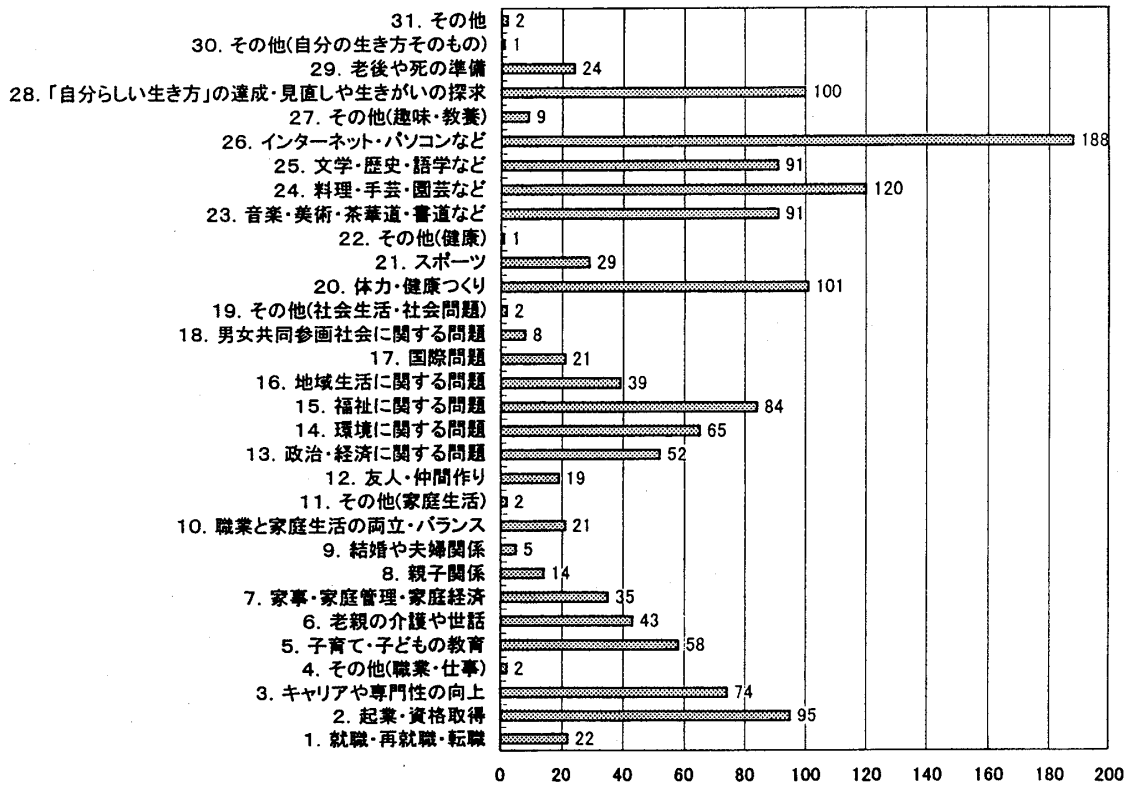


図2 最も学習してみたい課題

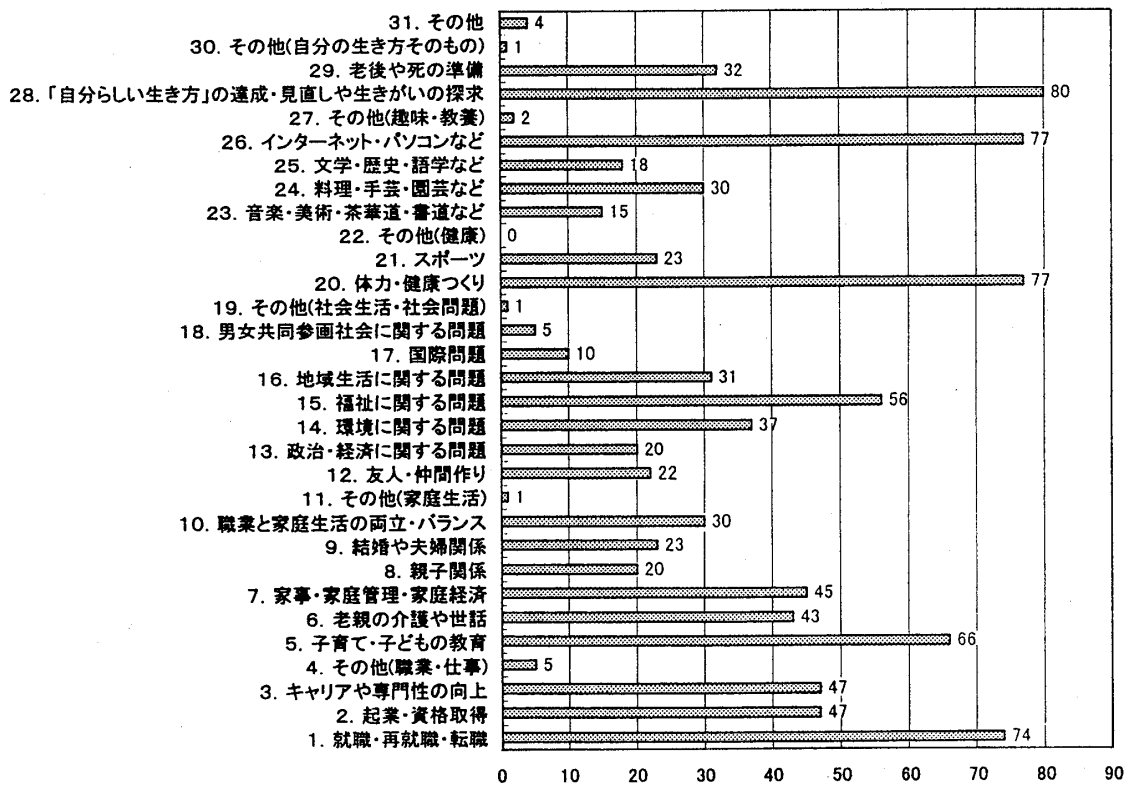


図3 助言や援助を必要としている問題・課題

表2 年齢段階別に見た関心課題・学習希望課題・要援助課題

(選択率の高い順に5位まで掲載)

年齢段階	関心のある課題	学習してみたい課題	助言や援助を要する課題
20～24歳	1. 就職・再就職・転職 2. 体力・健康づくり 3. 友人・仲間づくり 4. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 5. キャリアや専門性の向上	1. インターネット・パソコン 2. 文学・歴史・語学など 3. キャリアや専門性の向上 4. 起業・資格取得 5. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求	1. 就職・再就職・転職 2. キャリアや専門性の向上 3. 起業・資格取得 4. インターネット・パソコン 5. 体力・健康づくり
25～29歳	1. 就職・再就職・転職 2. 子育て・子どもの教育 3. 体力・健康づくり 4. 友人・仲間づくり 5. インターネット・パソコン	1. インターネット・パソコン 2. 料理・手芸・園芸など 3. 文学・歴史・語学など 4. 子育て・子どもの教育 4. 起業・資格取得	1. 子育て・子どもの教育 2. 就職・再就職・転職 3. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 4. インターネット・パソコン 4. 家事・家庭経営・家庭経済
30～34歳	1. 子育て・子どもの教育 2. 就職・再就職・転職 3. 体力・健康づくり 4. 家事・家庭経営・家庭経済 5. 友人・仲間づくり	1. 起業・資格取得 2. インターネット・パソコン 3. 子育て・子どもの教育 4. キャリアや専門性の向上 4. 料理・手芸・園芸など	1. 子育て・子どもの教育 2. 就職・再就職・転職 3. キャリアや専門性の向上 4. 体力・健康づくり 5. インターネット・パソコン
35～39歳	1. 子育て・子どもの教育 2. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 3. 家事・家庭経営・家庭経済 4. 体力・健康づくり 5. キャリアや専門性の向上	1. インターネット・パソコン 2. 起業・資格取得 2. キャリアや専門性の向上 4. 子育て・子どもの教育 4. 環境に関する問題	1. 子育て・子どもの教育 2. 就職・再就職・転職 3. 家事・家庭経営・家庭経済 4. 起業・資格取得 4. 老親の介護や世話 4. 親子関係
40～44歳	1. 子育て・子どもの教育 2. 体力・健康づくり 3. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 4. 家事・家庭経営・家庭経済 5. 環境に関する問題	1. インターネット・パソコン 2. キャリアや専門性の向上 3. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 4. 文学・歴史・語学など 5. 起業・資格取得	1. 子育て・子どもの教育 2. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 3. 体力・健康づくり 4. 家事・家庭経営・家庭経済 5. キャリアや専門性の向上
45～49歳	1. 体力・健康づくり 2. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 3. 老親の介護や世話 4. 就職・再就職・転職 4. 福祉に関する問題	1. インターネット・パソコン 2. 料理・手芸・園芸など 3. 体力・健康づくり 4. 音楽・美術・茶華道・書道など 5. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求	1. インターネット・パソコン 2. 体力・健康づくり 3. 就職・再就職・転職 3. 起業・資格取得 3. 老親の介護や世話
50～54歳	1. 体力・健康づくり 2. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 2. 老親の介護や世話 4. 福祉に関する問題 5. 環境に関する問題	1. インターネット・パソコン 2. 料理・手芸・園芸など 3. 体力・健康づくり 4. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 4. 福祉に関する問題	1. インターネット・パソコン 2. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 3. 老親の介護や世話 3. 福祉に関する問題 5. 体力・健康づくり
55～59歳	1. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 2. 体力・健康づくり 3. 福祉に関する問題 3. 老親の介護や世話 5. 就職・再就職・転職	1. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 2. インターネット・パソコン 3. 料理・手芸・園芸など 4. 音楽・美術・茶華道・書道など 5. 体力・健康づくり	1. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 2. インターネット・パソコン 3. 体力・健康づくり 3. 福祉に関する問題 5. 地域生活に関する問題
60～64歳	1. 体力・健康づくり 2. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 3. 福祉に関する問題 4. 地域生活に関する問題 5. 就職・再就職・転職	1. インターネット・パソコン 1. 料理・手芸・園芸など 1. 福祉に関する問題 4. 体力・健康づくり 5. 地域生活に関する問題	1. 体力・健康づくり 2. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 3. 福祉に関する問題 3. 就職・再就職・転職 3. インターネット・パソコン
65～69歳	1. 体力・健康づくり 2. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 3. 友人・仲間づくり 4. 福祉に関する問題 4. インターネット・パソコン	1. 体力・健康づくり 2. インターネット・パソコン 3. 料理・手芸・園芸など 4. 福祉に関する問題 5. 文学・歴史・語学など 5. 音楽・美術・茶華道・書道など	1. 体力・健康づくり 2. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 2. 福祉に関する問題 2. インターネット・パソコン 5. 老親の介護や世話
70歳～	1. 体力・健康づくり 2. 老後や死の準備 3. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 3. 福祉に関する問題 5. 地域生活に関する問題	1. 体力・健康づくり 2. インターネット・パソコン 3. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 4. 老後や死の準備 4. 福祉に関する問題	1. 福祉に関する問題 2. 老後や死の準備 2. インターネット・パソコン 4. 「自分らしい生き方」の見直し や生きがいの探求 5. 体力・健康づくり

など、家庭経営に関する課題が多かった。

以上の結果より、生涯学習支援は、日常生活に密着した生活課題や実務的課題と、自分の生き方そのものの探求という2つの次元で検討することが必要かつ重要であると考えられる。

3. ライフステージ（年齢段階）から見た関心課題・学習希望課題・要援助課題

年齢段階別に見た関心課題、学習希望課題、要援助課題の上位5位までの結果は、表2に示した。これによると、20代前半の青年期における、「就職・再就職・転職」、「キャリアや専門性の向上」、「起業・資格取得」、20代後半から30代にかけての「子育て・子どもの教育」、「家事・家庭経営・家庭経済」、40代後半から60代にかけての「老親の介護や世話」、「福祉に関する問題」、50代後半から60代前半における「就職・再就職・転職」、70代以降の「老後や死の準備」など、それぞれのライフステージで、関心課題、学習希望課題、要援助課題として上位に選択されている課題は、各々のライフステージにおける発達課題と合致したものであった。このことより、それぞれのライフステージにおける発達課題と対応した発達を支援するプログラムが有益かつ重要であると考えられる。

また、どのライフステージにおいても、「自分らしい生き方の見直しや生きがいの探求」が上位に選択されており、現代社会においては、青年期から成人期への移行期、中年期の入り口、現役引退期といった人生の節目のみならず、成人期・高齢期のどのライフステージにおいても、アイデンティティそのものの模索が切実な問題であることが推察された。

4. 生活の質の高低から見た関心課題・学習希望課題・要援助課題

次にQOL得点の平均値より高い者を、QOL高群、低い者をQOL低群として、関心課題、学習希望課題、要援助課題の内容の相違を検討した。図4、図5に示したように、選択された各々の課題の内容には大きな相違は見られなかった。しかしQOL高群は、低群に比較して、関心課題、学習希望課題の選択率が高く、QOL低群は高群に比べて、要援助課題の選択率が高かった。

この結果は、生涯学習へ主体的に関与していくためには、ある程度以上の生活の安定感や満足感が獲得されていることが前提となることを示唆している。生活の安定感や満足感の低い人々に対しては、主体的な学習プログラムよりも、ケア（援助）プログラムの方が、

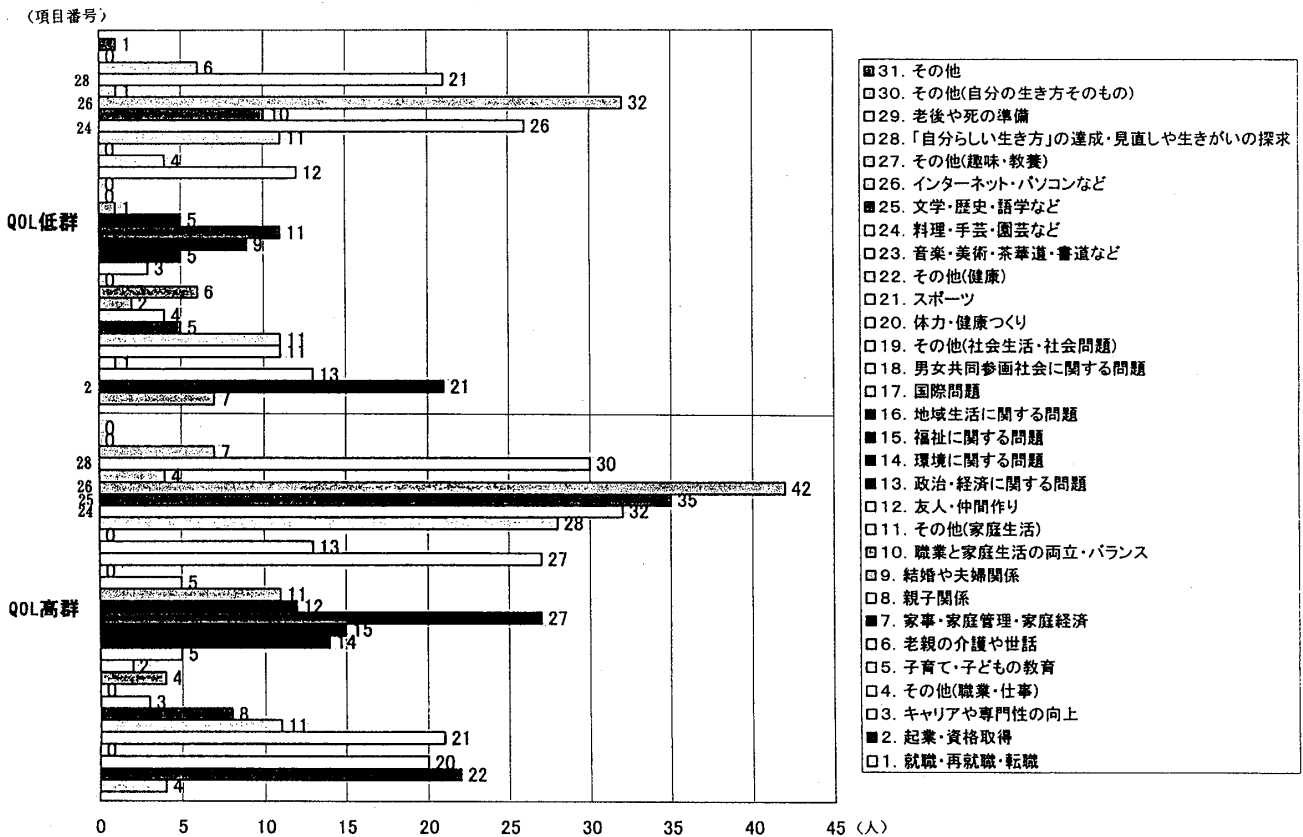


図4 QOL得点の高低群別に見た学習希望課題

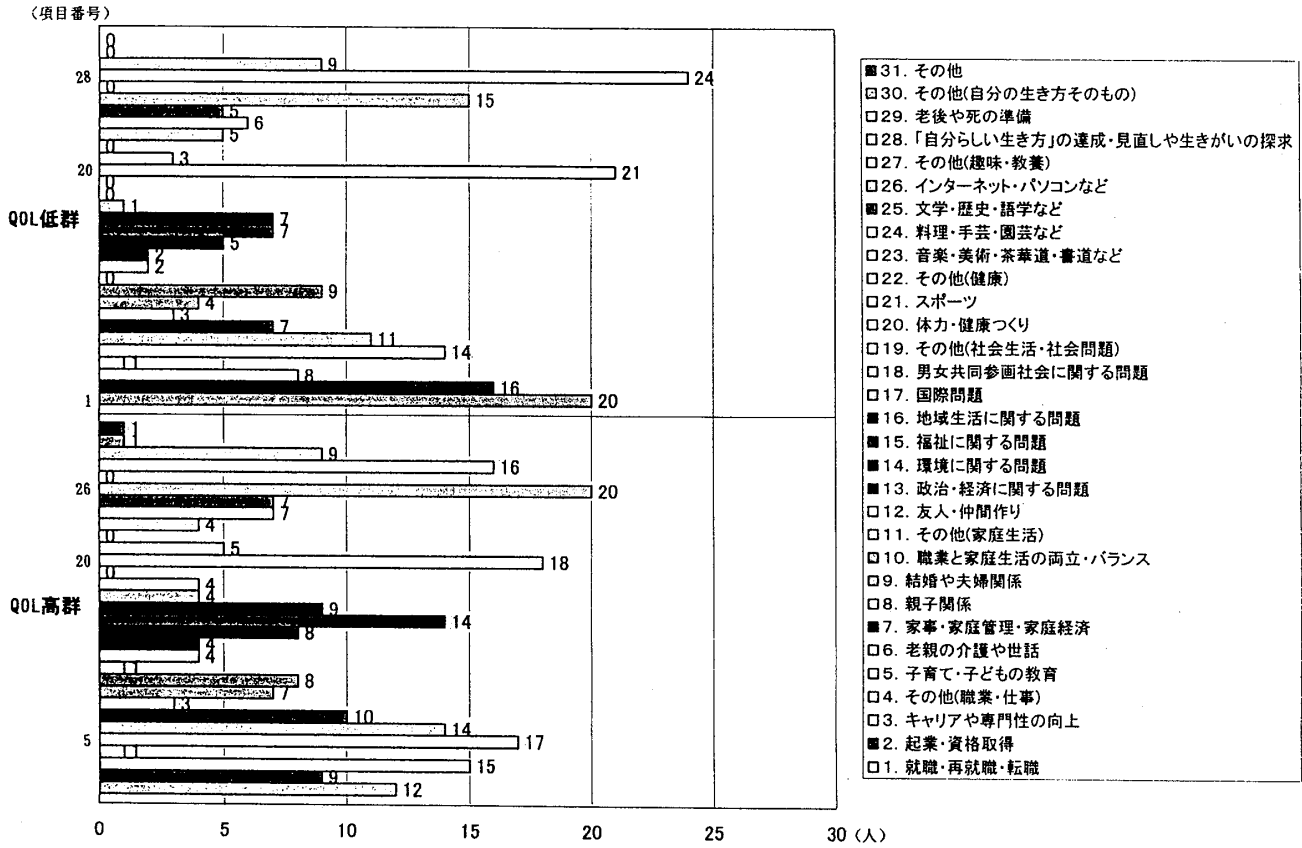


図5 QOL得点の高低群別に見た要援助課題

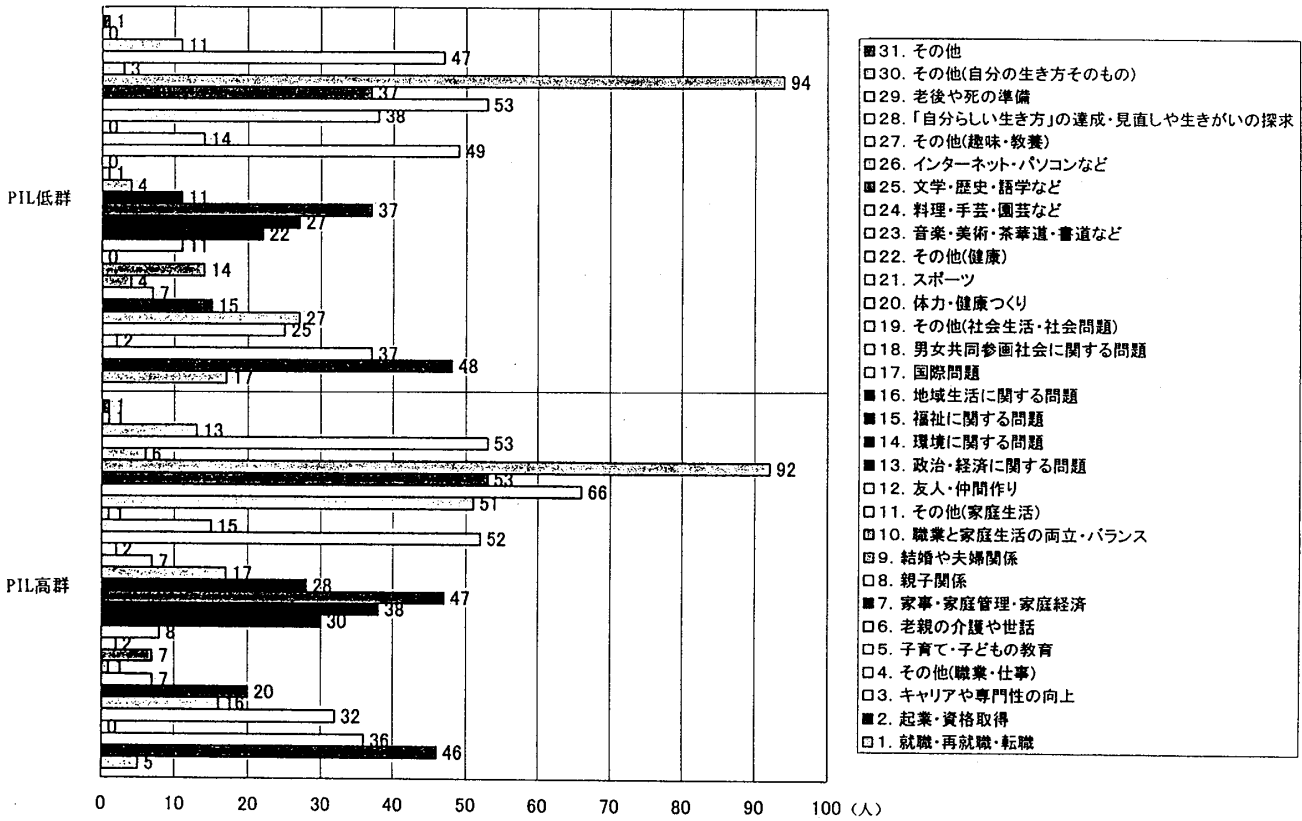


図6 PIL得点の高低群別に見た学習希望課題

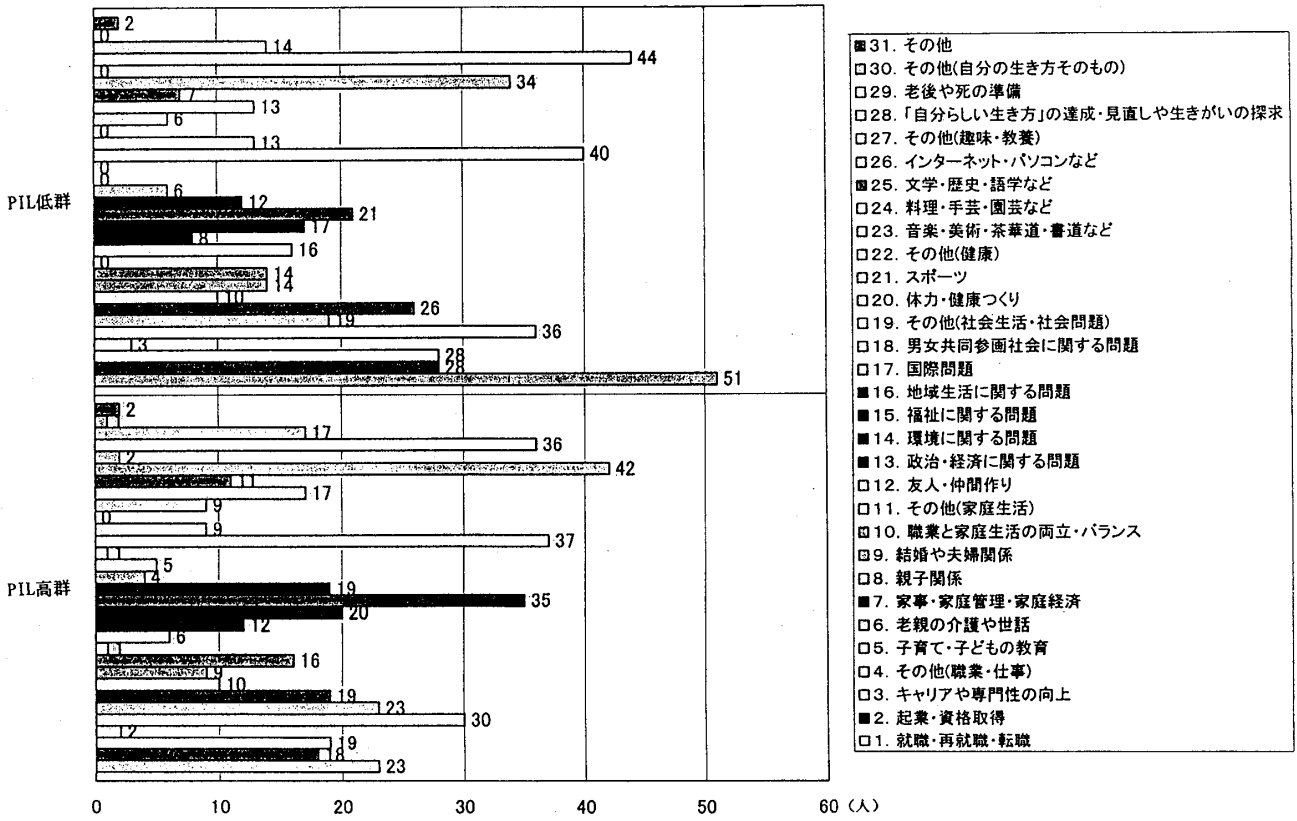


図7 PIL得点の高低群別に見た要援助課題

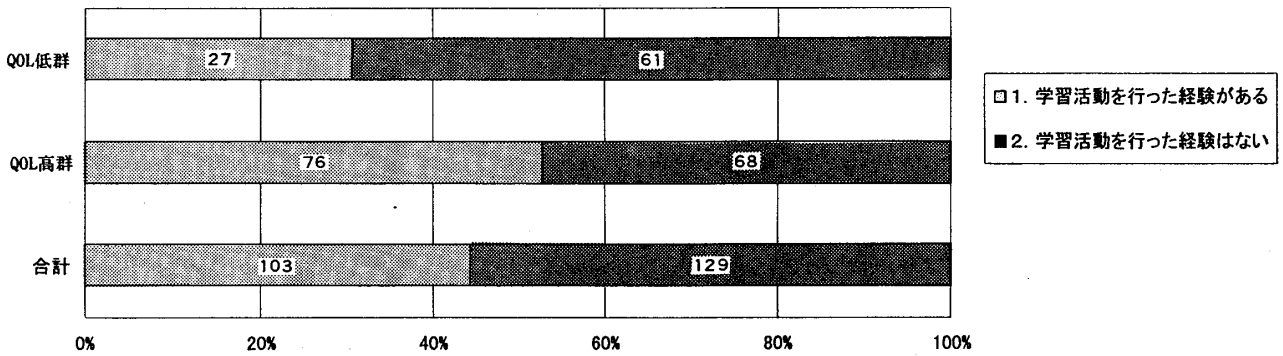


図8 QOL得点の高低群別に見た学習活動経験の有無

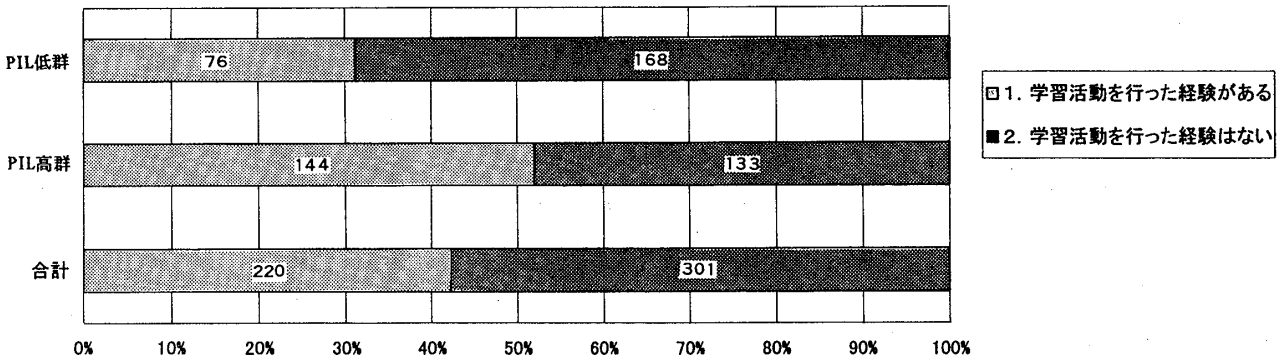


図9 PIL得点の高低群別に見た学習活動経験の有無

優先されるべきであろう。

5. 心理的充足感の高低から見た関心課題・学習希望課題・要援助課題

同様に、PIL得点の平均値より高い者を、PIL高群、低い者をPIL低群として、関心課題、学習希望課題、要援助課題の内容の相違を検討した。QOLほど顕著ではないが、ほぼ同様の結果が得られた(図6, 図7)。

また、図8, 図9に示したように、QOL, PILとも、高群の方が低群よりも、学習活動をおこなった経験がある者が多く、生涯学習活動によって生活の質や心理的充足感、人生の意味の認識が向上する可能性が示唆された。

全体的考察および今後の課題

本研究の結果を総合的に検討すると、高度生涯学習支援の今後の方向性として、次の点が考えられる。

1. 学習ニーズおよびQOLのレベルに合致した学習機会と内容の拡充

結果の5.で述べたように、生涯学習体験は、個々人の生活の質や心理的充足感の向上に有益であることが示唆された。さらに本研究によって、地域住民のQOLやPILのレベルに応じた学習プログラムが必要であることが明らかになった。つまり、QOLやPILのレベルの高い人々に対しては、主体的な学習ニーズに添った積極的な学習支援が有益である。例えば、大学等の高度専門教育機関が、内容、方法ともにそれらの講座を充実させるための支援を積極的に行っていくことが期待される。

一方、QOLやPILの低い人々に対しては、well-beingの土台となるケア・プログラムの方が、より適切であろう。これに対しては、地域社会へのケアや援助を目的とした施設との連携が有効であろう。

2. 学習プログラムの研究開発

学習希望課題については、結果1~3で述べたように、生活に密着した実務的課題や教養的課題、職能的課題と、自分の生き方そのものの探求の2つの次元の学習課題が求められていることが明らかとなった。今後は、ライフサイクルを通じての学習ニーズと援助ニーズの体系化を行うことが重要な課題であろう。

前者の生活に密着した実務的課題や教養的課題については、各地の社会教育施設で数多く実践されている

従来型のプログラムに、さらにきめ細かな工夫を重ねる方向で進めていけるであろう。

後者の「自分の生き方」そのものの探求という課題については、生涯を通じてのアイデンティティ探求という時代のニーズを反映しているとは言え、生涯学習プログラムとしての実践例はほとんど見られない。納得できる自分の生き方、つまりアイデンティティの模索や達成を援助するプログラムは、今後の生涯学習と援助の新しい方向性として、検討していく必要がある。例えば、ポスト子育て期、中年期の入り口、定年退職前後などの人生の節目において、多角的に自己を見直し、将来設計を行うなどの課題をとりあげることは有益であると考えられる。

さらに、職能的課題に対するニーズに対応するためには、社会の変化に合致した高度職業的能力開発学習のプログラムも重要であろう。

3. 専門スタッフの養成

さらに、これらの学習プログラムを質量ともに高め、地域に根付かせていくためには、それを推進する専門スタッフの養成が不可欠である。これは、学習プログラムの修了者や専門ボランティアなど、幅広い人材養成と登用が求められる。

引用文献

- Crumbaugh, J.C. & Maholick, L.T. 1969 Manual of Instruction for The Purpose-in-Life Test. Psychometric Affiliates.
- Erikson, E.H. 1950 Childhood and Society. New York: W.W.Norton. 仁科弥生(訳) 1977, 1980 幼児期と社会1・2. みすず書房.
- Havighurst, R.J. 1953 Developmental Tasks and Education. New York: McKay. 荘司雅子(訳) 1958 人間の発達課題と教育. 牧書店.
- 佐藤文子 1998 PILテストの全体像と分析法. システムパブリカ.
- 田崎美弥子・中根充文 1997 WHO/QOL-26の手引き. 金子書房.
- 付記 本研究は、平成14・15年度文部科学省地域貢献特別支援事業「高度生涯学習支援システム：コミュニティ・パートナーシップ構築事業」の一環として行われた。